

甘藷の歴史を探る (アジアから琉球)

～古文書から探る甘藷の伝播と携わった人たち～

はじめに

17 世紀、琉球国は気象災害の常襲地にあることから、ひとたび稲、麦、粟、黍、大豆の 5 穀が不作の年には本島や離島の人民は夏から秋の食糧に事欠く飢饉になり、飢餓に陥っていた。1605 年、野国総官は 5 穀が不作のときの食糧を補ない、琉球国の飢えからの脱出を図るため、甘藷(蕃薯)の導入を行った。さらに、1614 年から 1920 年は年貢搾取にもめげずに働く人民を飢餓から救済すべく、苗の配布や栽培技術の伝授に立ち上がった儀間眞常がいた。また、5 穀並びに甘藷の能力を引き出すのに手助けしたのは琉球の王府の偉人たちで、18 世紀は法司官蔡温が監修した農務帳(1734)や耕作方相試田地奉行所へ申出之條々(1745)を書いた寒水川村金城筑登之親雲上など、栽培法を書いた技術書や農民向けの手引き書が精力的に書かれた。書では、5 穀は概ね旧暦 8～9 月から播種し、翌年の 6 月早期までに収穫して、琉球の気象災害を回避する栽培法を構築した。また、甘藷を夏や秋冬に植え付けて輪作や間作する栽培技術、甘藷の畦立て栽培を見いだした。その書を世に出すまでに、導入から 129(1605～1734)年が経って、人口は 7～8 万から 20 万に達したよ う で あ る 。

2004.October～2005.Junury

## 1.甘藷(蕃薯)の琉球国への伝来(導入)

① 琉球国への甘藷導入に当たっては、「球陽(p69-70)」の尚寧王 17 年(西暦 1605 年)に、「<sup>ツェンクワン</sup>総官野國中華ヨリ<sup>ハンス</sup>蕃薯ヲ帯ビ来シ以テ國ニ播ク。総官野國ハ野國邑ノ人。中華ヨリ蕃薯ヲ盆上ニ植ヘテ帯ビ来ス。<sup>まへいこう</sup>麻平衡(儀間親方眞常)之ヲ聞キ往イテ其ノ苗ヲ乞ヒ且栽培ノ法ヲ問フ。野國之ニ告ケテ曰ク(中略)、己ニ実熟スル時ニ當リ、掘ツテ以テ之ヲ食ス(後略)」に記録されている。北谷間切の野国総官が中華(唐=<sup>ミン</sup>?)と親交の内に「蕃薯」(?での呼び名)を分けて貰い、堂々と鉢植えにして進貢船に乗せて帯びて(携え)持ってきたと導入先と導入地を記している。球陽には、導入時の増殖栽培から普及奨励までの 1605～1620 年の 15 年間(眞常 48～63 歳(麻姓家譜より))が圧縮されて記載される。野国総官は「蕃薯」を中華で見聞し、琉球国で気象災害(台風と旱魃)のときでも、災害以前に栽培を開始しておれば地中に実(芋)を結び、地中の芋を掘取って食べれば、飢餓から人民を救えることも洞察されて、導入に至る。しかして、「蕃薯」は鉢植え(鉢の中に芋が有ったか疑問)で、長い航海にも枯れないように持ってきたことから、その時代にあつては卓越した判断力を持っていたことが窺える。そのときの品種は、球陽の<sup>おきなじとう</sup>翁自道=<sup>いしやどうべーちんう</sup>伊舎堂親雲上<sup>むや</sup>旨屋(西暦 1694 年=尚貞王 27 年))の一説から推測すれば、皮赤く実白のいわゆる「赤薯」の 1 品種と特定できる(他県の甘藷のことを記載した書では、野国総官の導入した品種が 3 種となっている

が、誤記である)。

② 宮古島への甘藷導入に当たっては、フィリピンから<sup>ミン</sup>に伝来後(西暦 1594 年)に「蕃薯<sup>ハンズ</sup>」と命名されて後の 3 年後の 1597 年に、「蕃薯=赤薯」として宮古山(宮古郡)に伝わって、宮古山の本島をはじめ離島(伊良部、多良間、池間)に普及したとのことである。「御嶽由来記」の附記において、長眞氏 砂川親雲上<sup>べーちんう むや</sup>旨屋が中国から初めて宮古島に蕃薯を導入した記載ある(宮古島旧記並史歌集解,1977)。「長眞氏家譜正統記」には「砂川親雲上<sup>べーちんう むや</sup>旨屋、(中略)旧暦 22 年(文禄 4 年)御物幸<sup>貢 物さいりょう</sup> 領ヲ爲スタメ、至ル中山、公事全終、帰島ノ砌、逆風ニ逢イ唐ニ漂着。旧暦 25 年(尚寧王 9 年、西暦 1597 年)帰島ノ時(3 年後)、亦大和へ乗越シ、同年ニ帰島ス、此時、唐芋桂持<sup>とういもかつら</sup>チ下ゲ、世上ニ流布ス」(儀間眞常傳)とある。砂川親雲<sup>べーちん</sup>は中山に貢物を運送した後、中山から返る際に逆風にあつて唐に流れ着き、3 年間滞在し、その後に唐から宮古島に帰るとき、また逆風で大和まで行き着き、何日滞在したか解らないが、その数日後に大和から宮古島に戻り、「唐芋桂(蔓)」を持ち帰り、世に流布したと書かれている。桂は植物体の芋蔓であり、唐からの帰りが何日に及んだか知れないが枯れることなく宮古島に活着して世に広めている。砂川親雲<sup>べーちん</sup>は宮古島の頭役で八重山にも行き来しているが、「蕃薯(唐芋桂)」が宮古島から八重山に、或いは琉球本島の中山に伝わった記載ない。「蕃薯」は今でも宮古言葉で中国名を残したハンチンやハンツン(甘藷の文化誌)と呼ばれている。まだ宮古島の畑の畦畔にはあちこちに 400 年経った今でも導入の時のままの芋葛らしき物が自生種のように生える。

③ 八重山与那国への芋導入には、島の指導者なる兄弟(ウトニア、アニシカ)がけんかの果てに与那国島から中華(唐=<sup>ミン</sup>?)に散逸するが、また与那国に戻る際の 1612 年に「蕃薯(赤薯<sup>ハンズ</sup>)」を携えて帰島して、島に品種が定着(与那国の歴史)し、今でも赤薯を意味するカナウンテや、ハンズに似た与那国言葉のウンチン、ウンチーと呼ばれる(甘藷の文化誌)。また、導入の時の儘の芋蔓らしき物が、島の畑の畦畔のあちこちに自生種のように生えている。

④ 八重山石垣島への芋導入には、1694 年に波照間高康が中国の寧波で買い求めた芋が導入された記載がある。この蕃薯は、果肉が黄色いので「黄蕃薯」と呼んだが、外皮は「赤薯」で、八重山本島や離島の波照間、西表、小浜に広まって栽培利用された(尚、このことは球陽に記載無い)。この黄蕃薯は、今でも八重山方言でアングンやアッコン(甘藷の文化誌)と呼ばれている。

⑤ 2 度目の琉球国への蕃薯導入に当たっては、麻姓家譜に記され、唐に数品種の芋があることを麻治定<sup>まじてい</sup>=儀間親雲上<sup>しんしゅう</sup> 周(儀間眞常末裔)が聞き及び、小禄間切儀間村住人の船越筑登之が進貢船で唐に渡る際に頼み(西暦 1691 年、尚貞王 23 年)、帰りの航海(西暦 1692

年=尚貞王 24 年)で「黄色蕃薯」を導入している。船越筑登之は 5 粒の芋でしかも土鉢植にして持ってきて、儀間親雲上眞周がこれを受け取り、屋敷内に植えて増殖した後に、国中に伝播したと記載している(儀間眞常傳)。

⑥ 3 度目の琉球國への蕃薯導入に当たっては、1694 年に波照間高康が?で買い求めた芋の一部を翁自道に託する。球陽(p121)によると、「翁自道=伊舍堂親雲上旨屋(尚貞王 27 年) 黄薯ヲ带来シ以テ國ニ植ユ、(中略)黄薯薯?ヨリシテ带来シ以テ之ヲ家宅ニ植へ、以テ繁昌ヲ到シテ、各処ニ分典ス、ソノ蕃薯獨リ別種ト異リ、風ヲ凌キ、寒ニ耐ユ。繁蔓蕃行シテ四季衰ヘズ尤モ民ヲシテ利ヲ得セシム」とされ、琉球中山に同じ「黄蕃薯」が伊舍堂親雲上旨屋によって導入されたと記録されている。「黄蕃薯」は黄色い果肉で、風を凌ぎ(耐風性)、寒さに耐えて蔓繁る性質(耐冷性)があり、冬でも良く繁茂して四季とも衰えず収量が高い、各所に配布して、後には収益(収穫物)も多くもたらされている。よって、本島では外皮は「赤薯」で、果肉の黄色を指す「黄蕃薯」と記載されるようになったと推測する。

## 2.西暦 1605 年～1707 年までの品種

① 球陽(p121、西暦 1694 年=尚貞王 27 年)の黄蕃薯を導入した記載と同時に、当時の琉球国の品種を 1605 年～1707 年までをまとめて圧縮して書いている。「蕃薯ニ数種アリ、1)皮赤く実白ナルアリ、2)皮実俱ニ白キナルアリ、3)皮赤く実黄ノイモノアリ」の 3 品種である。蕃薯の一つの品種は、導入当時の「蕃薯=赤薯」とされる「1)皮赤く実白ナルアリ」で、1614～1620 年で儀間眞常が奨励した「蕃薯」の名前と共に野国総官の恩に報いて祭祀する物がある。宮古と与那国の導入種も中華(唐=? )からであり、「蕃薯=赤薯」と同一の物と推測する。二番目の品種は見当が付かず宙に浮いている。三番目の品種「3)皮赤く実黄ノイモノアリ」は波照間高康や伊舍堂親雲上が導入した「黄蕃薯」と儀間眞周が導入した「黄色蕃薯」と併せて、3 種類があったと推測できる。しかし、筆者は「黄色蕃薯」と「黄蕃薯」は芋の性質が似ていることや、同じ地域で同じ年代に売られていたことから同一の品種と考えている。このことから、当時の琉球国の品種は 3 種あって、品種によってカツラの性質や芋の収量も違うなど、いわゆる品種の価値について、蕃薯の導入から 86 年後に至り理解され始める。

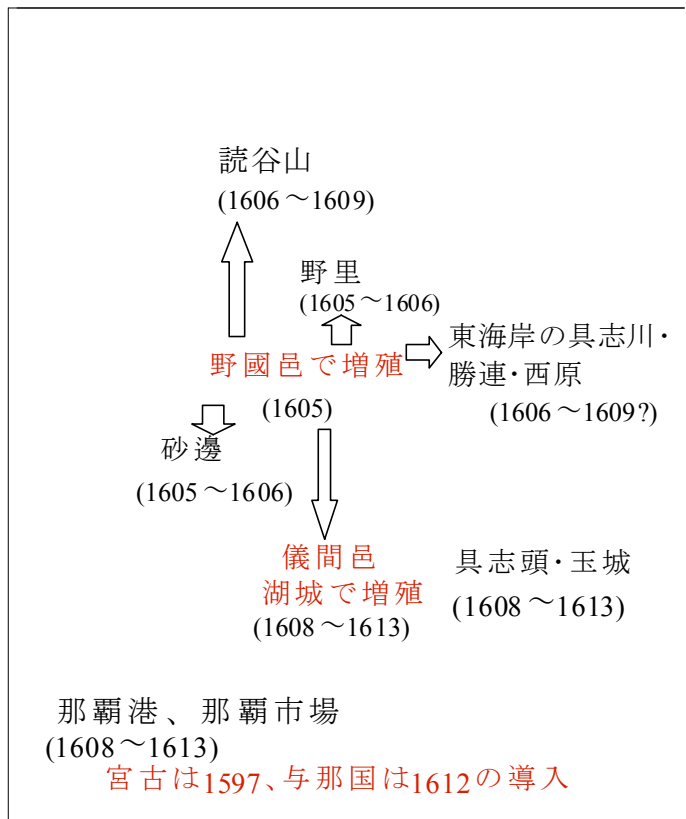
② 品種には自然に出来たものも含まれ、球陽(p131、尚貞王 39 年=西暦 1707 年)に記載されている。それによると、「金武郡古知屋邑ノ名嘉眞、一日濱ニ往キ潮ヲ汲ムヤ、(道の途中に)一蕃薯ヲ見タリ、葉ハ己ニ裂開シ、色ハ紅ニシテ常ニ異ルヲ見タリ、名嘉眞之ヲ奇疑トシ、即チ此薯ヲ帶ビテ、之ヲ宅地ニ植ユルニ、葉自ラ茂盛シ、実ヲ結ブト顆多ナリ、熟スルトキ最モ早く、地ノ肥瘦ヲ選バス、亦能ク風寒ニ耐ヘ凌キテ常ノ蕃薯ニ絶勝

ス、人皆来ツテ其ノ種ヲ求メ以テ栽植ヲナス、之レヲ名ケテ古知屋芋ト曰フ」とある。金武郡古知屋村の名嘉眞が海に潮汲みに通う途中で見つけた芋の品種である。自然の自家受粉実生なのか枝変わりなのかは確認できない。葉がカエデの葉のように裂開して、葉色は赤く、芋が早く多く着いて多収である。痩せた土壌や肥沃な土壌でも良く生育して繁茂し4季とも勢いがあり、耐冷性もある。明らかに他と異なる特徴を持つ品種を見つけている。その早熟多収の芋品種を古知屋芋と称し絶賛されて、周りの人に分配し、王府にも伝わり、西暦 1731 年に褒美の黄冠が授けられる。このことより、1707 年までの 102 年間で蕃薯の品種は導入種を整理した 3 品種と古知屋芋を合わせて 4 品種があったと窺える。

### 3.野国村での野国総官による蕃薯の増殖と普及、栽培の拡大並びに儀間眞常との対談

野国総官の導入した「蕃薯」は、野国総官によって 1605～1606 年に野国村で増殖の後

に砂辺、野里の二村にも伝搬した。この後、読谷山に広がり、東海岸の中山=具志川・勝連・西原に栽培が広まるのも 1606～1609 年と推測できるので、右図に示した(但し、古文書に記載ない)。芋葛を持ってきてから 3 年後に、蕃薯導入のことを儀間眞常を知り、野国総官を訪ねて会談(麻姓家譜、眞常 51 歳=尚寧王 20 年=西暦 1608 年)している。野国総官が儀間眞常に伝えたのは、5 穀は地上に実るが、蕃薯は地下に実(芋)を作り、台風や旱魃の気象災害の常襲地の琉球でも、地上部は被害を被りやすいが、蕃薯は地上の被害を受けても地中の実りには影響が少ないので、芋は 5 穀が不足の時の飢饉を補



### 野国総官による蕃薯の伝来(1605)から国内伝搬(1613)の推測経路

う食糧として打って付けで、飢饉に備えて植栽を励行して、飢饉のときにこれを食すれば、人民を飢饉から救うことも可能になり得ると真摯に受け止めている。とりわけ、野国総官と儀間眞常は琉球の人民を飢饉から救うことは、利害を度外視しても進めるべき仕事だと解釈したと考えている(球陽 p69-70 及び麻姓家譜僉議書に記載)。両氏ともに琉球において蕃薯を前に創造性と今後の展開や意志が結合するが、業務は分かれる。幾つかの栽培の注

意点を聞いた後に蕃薯の蔓を貰い受けて、野国総官との約束を果たすべく、出身地の小禄儀間村の湖城に展示圃を設けて増殖し、その間の栽培で地域適応性が判明しつつあったと思われる。

#### 4.蕃薯普及の一時中断

蕃薯が琉球に導入されて僅か 3~4 年後、しかも蕃薯伝搬の途中で、人民救済のための蕃薯普及の脅威に立たされる。琉球国に気象災害による飢餓以上に恐ろしいことが起こる。徳川家康の命令の元、薩摩(薩州)島津家久の部下、樺山権左衛門尉久高 総大将の率いる重火器隊の侵略戦争(尚寧王 21 年=西暦 1609 年)に見舞われる。奇襲攻撃は、琉球に重火器や刀がないのを承知の上で、仕掛けられる。第一の犠牲者は、戦う術を全く持たない今帰仁村古宇利島の農民から出る。刃向かう人は殺され、茅葺き家を焼き払われても戦力装備の全くない空手や農機具では全く戦えず、僅か 4.5 日で那覇首里に至り焼かれて全面降伏して、琉球は敗戦国になり、王は捕虜となる。

諸見里眞行著の儀間眞常傳(眞姓家譜より引用)によれば、儀間眞常は尚寧王が捕虜となって薩摩藩主と江戸の徳川家康への上国(連行される)の際に勢頭役(眞常 52~54 歳、尚寧王 21~23 年=1609~1611 年)として、那覇出港~薩州より帰国の足かけ 3 年間の随行として上船せざるを得ず、普及も一時的に断念せざるを得なかったと考える。(余談であるが、薩摩の薩州にいるときも儀間眞常は休むことを知らず、琉球國の人民の衣服のことも気に掛け、綿織物を織る人たちを見て綿織物で寒さを凌ぐことを知る。薩摩から帰国の際に木綿種子と糸を紡ぎ綿織物を織る女性技術者 2 人を連れて還って、綿織物の普及を図る)

#### 5.蕃薯の価値を知り、苗の増殖と普及拡大と地域への定着を図る

儀間眞常が薩州より帰還した後の 1613 年(尚寧王 25 年)に飢饉が起こる、これは琉球國が侵略戦争に負けたことによって王府や人民の心身疲労があったのか、気象災害によって五穀の実りが悪かったのか、あるいは蕃薯の栽培法が十分に行き渡ってなくて芋が穫れず食料にならなかったのか、人民は食糧難によって餓死者が出て世は大打撃を受けた。球陽(p69-70)の記載は、このときの災害時を指していると思われるが「(前略)平衡(儀間眞常のこと)其言ノ如ク以テ植栽ヲナス、数年ヲ経テ蕃薯繁多ナリ、一年凶荒ニシテ五穀登ラズ、民人飢饉ナレバ、平衡掘ツテ蕃薯ヲ用イ、人民ヲ賑済ス、時ニ蕃薯ヲ以テ五穀ヲ補フ、本国ノ珍寶、此ヨリ大ナル莫キヲ念フ」と書いている、推測ではあるが、儀間眞常が 1608 年に植えてあった蕃薯の実を 1613 年に掘り出して食し、飢饉で人民にも食させると元気が出て、飢餓から救済できることが解り、5 穀が不作の時に当たり、蕃薯がその補いとなり、将来、國の発展に寄与し得ることを首里王府に献策(上申)したと考えられる。このときを期に蕃薯が國を救済する偉大なる作物として、増殖を拡大し続けたと考えられる。蕃薯は飢饉のときに生芋を煮て食べるが、飢饉に備えて干し芋を作り飢餓を乗り越えることがで

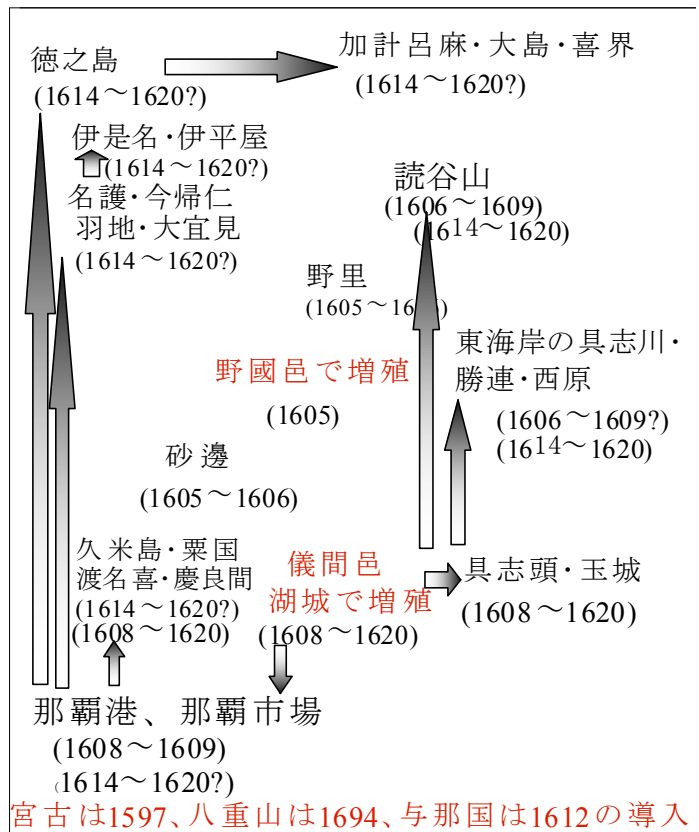
きることから、国中に蕃薯を普及奨励して広めることを実行に移す初期の段階にある。(飢饉に備えた干し芋作りは、栽培の基盤作りを記載した農務帳(1734、蔡温が執筆と監修)にその加工と利用を記載している。

薩摩藩は 1613 年に起こった飢饉と餓死者の発生を気に掛ける。薩摩藩は占領地の人民に気象災害による餓死者がでると、年貢を取る相手がいなくなって、困る事態になることは必定であるから、琉球王府内の三司官宛に覚書(=命令書、琉球國旧記)を送る。それに基づいて、儀間眞常は王府の三司官から田地奉行(眞常 55 歳、尚寧王 26 年=西暦 1614、麻姓家譜)を拜命する。目的は、5 穀の補助となる食糧を確保して飢餓から人民を救済し、上納米が遅滞なく納付できるようにするためであり、国中に蕃薯の普及奨励をする。

### 6. 儀間眞常による「蕃薯」の普及拡大

「蕃薯」は、儀間眞常が 1608 ~1609 年に小禄儀間村の湖城で増殖し、その間の栽培で地域適応性や栽培方法や食べ方が判明しつつあり、南山の具志頭、玉城、久高島に広まって行ったことが推測できる。しかし、1609 年から 1612 年、1613 年まで普及を休止したことも古文書から読みとれる。

「蕃薯」普及の再開は 1614 年と考えるが、眞常 56~63 歳の足かけ 8 年(西暦 1614~1620=尚寧王 26~32 年)で本島と離島に普及督励した。種苗は先に増殖していた蕃薯の條(蔓)を持って各所を巡り、頭役やあるいは直接農民に蕃薯の畑に植えたときの栽培法や特性、その実は煮芋や



### 儀間眞常による国内伝搬(1614~1620)の推測経路

干し芋で食することを告げて、地域に品種が定着するよう勤める。普及の地名と年代は図に示したが、小禄から本島中山や南山、勢頭役も 2 度やったことのある眞常であるから、那覇の港から海を渡り周辺離島の渡名喜、久米島、粟国、慶良間島、北山の今帰仁運天や大宜味塩屋の入り江を拠点として周辺離島の伊平屋、伊是名、伊江島まで栽培を広め、国中に広まり、栽培が普及拡大して行き渡ったのではないかと推測できる。年に 3 回の巡回

督励は、1 年の 2/3 の日数にも及んだとのことで、そのバイタリティーたるや精力絶倫の人(儀間眞常傳)と書かれている。儀間眞常は野国総官との約束を果たし(儀間眞常傳、<sup>せんぎしよ</sup>僉議書)、人民や国のためならば、その意志たるやただ者ではない一途な人格を持ち、一期未代、末裔までも蕃薯や工芸(食糧)作物に関わっていく事が窺える。薩摩離島への行程は、島津家の了解の元に与論を除く離島(元琉球国では琉球征伐後も気象災害に備えて蕃薯や蘇鉄の植栽が進められている 1614 年~1620 年頃)の大島、徳之島、喜界、加計呂麻に及び、琉球國から飢餓の回避に必要な不可欠の物として蕃薯が伝播したものと推測する。甘藷のことを地元で命の糧となったことから、伝えられた名に敬意を込めて蕃薯(甘藷の文化誌)と呼んだと考える。

#### 7.公式名称の甘藷や呼び名のウム=ンムに至る経過

17 世紀に導入された「蕃薯」<sup>ハンズ</sup>と呼ばれた名前は、時代の移り変わりと共にその名前が漢字からひらがなに変わってくる。蔡温 具志頭親方 分若の執筆した球陽(1726~1745)での記載は全て「蕃薯」<sup>ハンズ</sup>、同じく蔡温の執筆した農民向けの農務帳(1734)では「はんす、はんす芋」とひらがなへと変わったのみである。18 世紀では、さらに解りやすさが強調されて、農民向けの栽培の手引きの金城筑登之親雲上の耕作方相試田地奉行所へ申出之條々(1745)には「はへ(這う)芋、かつら(蔓、桂)、芋かつら」となっている。19 世紀では、西村外間農書(1838)の「芋、かつら」をはじめ、山川親雲上の耕作下知方并藪物作節附帳(1840)にも「芋、芋かつら、かつら種子」、高良筑登之親雲上の田方并芋野菜類養生方大概之心得年(年代不詳 1790?~1820?)の農業技術書には「3~4 品種のかつら名の楮(こうぞ?)、唐蔓、黒かつら」、八重山嶋農務帳(1874(明 7)には「芋」といづれも解りやすく説明されている。このようなことから、芋の繁殖は 17~19 世紀に至るまで蔓で繁殖させていたことが解る。かつらにもかつら種子と芋かつらとがあり、芋から催芽して苗に使うかつら種子と畑から取る芋かつらには違いがある。なぜ、当時の琉球で「はんすやウム」と呼ばれたかも、球陽や農務帳が起源であると解釈する。但し、漢字で芋(いも)と書くが、琉球語ではウムやンムと発音して呼び、蔓もかつらとの記載有るが発音はカンダ(各方言名は既に示した)としたと考える。農務帳との名称の違いは、農務帳の作成以前に既に儀間眞常の栽培指導した場所では名前まで「蕃薯」<sup>ハンズ</sup>で普及され、宮古・八重山でも導入当時の名を残したまま行き渡って、ハンズに近い発音の名前が定着したと考える。

また、明治 38 年に至り、尋常高等小学校の教科書には蕃藷、甘藷とも書かれ、当時の庶民は琉球語の呼び名でウムかンムと呼んでいる。この頃には琉球農事試験場もできて公式名称を甘藷と呼んでいる。甘藷の文化誌には時代の経過の中で「蕃薯、藩藷、甘藷」、明治大正昭和とも公式に「蕃藷、甘藷」で呼ばれている。琉球民謡では概ね芋と書き発音はウムで行き渡っている。極端な例では「むんじゅる雨笠」の歌詞の中に「ウムのまあさや唐かんだ」とあるが、唐かんだの芋は美味しいという意味だと思うが、その由来は高良

筑登之親雲上の農務帳(年代不詳 1790?~1820?)にある唐蔓、黒かつらの名称の一部ではないかと考える。

## 8.導入後の栽培法

栽培法で最も古い記述は、球陽(p69-70)に苗の挿苗時の植え方の記載の「蕃薯ノ條ハ圈ヲナス、之ヲ土ニ埋ム、」あるいは「蕃薯ノ條ヲ切ッテ之ヲ野ニ播く」とあり、條(蔓のこと)を丸くして土の中に植えるとある(現在この栽培法は栗国村の仲地氏が実行している)。野国総官と儀間眞常の栽培法には完成した技術方法が有るわけではないから、これ以上に触れることはできない。

栽培法の完成は 18 世紀初期になるとおもわれる、その記述は金城筑登之親雲上の耕作方相試田地奉行所へ申出之條々(1745)で、「畦立て」栽培がスタートし、一つ、畦間 45cm 程、株間 18cm 程、畦の上に一条植、肥料は追肥方式で水肥を畦立ての上から少し掛ける。現在では水肥を使う人はいないが、水肥は根の近くまで浸透するから合理的である、使い方株の真上か株間に掛けるか見えない。草取り(除草のこと)4~5回と「切り戻し」や「蔓返し」をも行う。現在は、今帰仁村、与那城町、読谷村でこの技術を覚えている方もおられるが、実行している方は一部である。一つ、そら豆や木綿と間作するときにはそれ相応の栽培法がある。一つ、這う芋の栽培法では、畦間 90cm 程、株間 18cm 程、畦の上に一条植として、植付と同時に下肥(基肥のこと)をかざらず株元の土の中に入れる。極めつけの最新の技術は、芋の生産には適宜に種芋を伏せ込んで種かつらを作り、「種芋の大きさ」も記載されている。甘藷は蔓のみからの繁殖では品種の劣化を招きやすく芋の肥大が悪くなるので、品種特性を維持するには 2 年置き位に優良な種芋から新しく種蔓を養成する必要がある。水肥や厩肥の重要性も説いており、技術的に高く評価できる。かつらを植えて後に足で踏みつけて、茎と土を密着(馴染ませる)させることも書いているが、昭和までも沖縄(沖縄農家便覧(昭 3))の何処の栽培でもやっていたことである。栽培の技術面では、順調に構築されて、導入当初は葛を植えて数年(球陽,p69-70)で実を結ぶといわれたものが、栽培の 3~4 年後(1608~1609 年)には栽培技術が解り始めて約 1 年で実が付くといわれ、89 年後の「黄色蕃薯」と「黄蕃薯」の導入や多収の芋品種の古知屋芋の開発によって、数月もすると芋ができて人民が食べれることが解っている。同時に、芋は数ヶ月で穫れて年に 2 作作る技術も達成されて、技術がほぼ完成している。

## 9.琉球国に蕃薯が導入されてあと上国の経過、名称の改竄

① 琉球国に甘藷が導入されてあとの上国は、甘藷の文化誌に掲載される。ここで引用して紹介すると、長崎平戸へは 1615 年にウイリアム、アダムス(三浦安針)が長崎平戸に向かう航海の途中で食糧難で琉球に立ち寄り、那覇で売られていた芋を買い求めて食料調達し、長崎平戸に滞在し、芋の残りをリチャード、コックスが栽培を試みたと推測する。品



種は「蕃薯」(赤薯)と思われるが琉球芋と名が残っているようであり、その後の九州への伝播や人民救済の経過から考えると、野國・宮古山・与那國に導入された蕃薯の初期の芋である。1732～1733年(享保17～18年)の大飢饉の時に、幕府人民が16万9千9百余人の餓死(儀間眞常傳、(大日本農史から引用))が出たにもかかわらず、この蕃薯に頼り飢餓を乗り越えた(儀間眞常傳、(南島偉功傳から引用))地域もあると書かれることから、この品種も優れた特性を持った蕃薯であったと解釈できる。

② 琉球国から薩摩種子島への甘藷の上陸は、1698年(尚貞王30年)に種子島九基に王府から一籠の芋が献上(儀間眞常傳(大日本農史から引用))されていて、その一部を種芋(耐冷性を備えた優良品種の黄蕃薯か古知屋芋であった考える)として使ったと考る。種子島は、徳川幕府及び島津藩の最新の重火器類の武器製造所であり、薩摩島津藩の要所である、1705年(尚貞王37年)にその一声で琉球王府から一籠の芋と栽培の手引き書を献上させるくらいは造作もないことと解釈する。

③ また琉球から薩摩山川町(本島)への上陸は、1705年前田利右衛門なる商売人が芋を買い求め、その一部を種芋(最新の優良品種の黄蕃薯か古知屋芋と栽培法も同時に習ったと考える)としたものの中から種苗として分離している。この品種によって、徳川幕府では1732～1733年(享保17～18年)の大飢饉の時に、未曾有の餓死(儀間眞常傳、(大日本農史から引用))が出たにもかかわらず、薩、隅、日の州の地域は蕃薯に頼り飢えを救い得た(儀間眞常傳、(南島偉功傳から引用))ことが書かれる。徳川幕府及び島津藩の飢饉の時の人民救済の意図など全く目は利かず、藩や幕府の面目丸つぶれの状況が窺える。前田利右衛門は、その功績をたたえて祭祀される。

徳川幕府では、大飢饉の餓死が出て、蕃薯に頼り飢えを救い得たことが薩摩から江戸へ伝わり、蕃薯の重要性の認識が確立したものと解釈する。蕃薯の上国が始まる、封建社会の江戸時代徳川吉宗が大岡越前に命じ、その家臣の青木昆陽に栽培研究を命じ、蕃藷(薩摩から伝わった呼び名)を取り寄せて栽培試験して、出来た農家向けの栽培手引き書が「蕃藷考(1735)」であった。琉球国が「はんす」と命名して作成した栽培手引き書の①蔡温の農務帳(1734)や②金城筑登之親雲上の耕作方相試田地奉行所へ申出之條々(1745)の作成に129年(1605～1734,1745)以上も要したが、徳川幕府は蕃藷を薩摩から取り寄(1735年正月)せて青木昆陽に栽培させ僅か1年で品種も栽培書も作り上げて、琉球の農務帳に1～2年遅れて芋の名称は薩摩芋と命名した。青木昆陽はその功績をたたえて祭祀されるが、他県都には野国総官や儀間眞常、琉球王府の役人の祭祀のかけらもない。

## 10.引用文献

1)新講一千年史 上巻(1971,Sep.) 新屋敷幸繁著 雄山閣

- 2)産業の大恩人 儀間眞常傳(1955, April) 諸見里眞幸著 向春印刷株式会社  
 当時の状態は球陽や琉球國旧記、琉球由来記、大日本農史、南島偉功傳より引用される。
- 3)麻姓家譜(1959, 昭 34)西原眞愛写本 沖縄県立図書館蔵書
- 4)時代を開く 儀間眞常(1995, June) 田名眞之著 那覇出版社
- 5)球陽 (王府に報告された歴史上の事柄として雍正 7 年(西暦 1729, 享保 14)年～乾隆 10 年(西暦 1745, 延享 2 年)の 17 年間に亘り 5 名で執筆、①法司官蔡温 具志頭親方 分若、②法司官 今歸仁親方 向儉徳 朝見③法司官 宜野湾親方 向得功 朝恒④總宋正 本部王子 向文忠 朝隆⑤總宋正 大城按司 向依仁 朝倚) 全(1969, June) 桑江克英 (1936, Sep. 訳 終了) 著 上原印刷所
- 6)琉球の甘藷を考える 甘藷の文化誌(1998)、比嘉武吉 榕樹書林
- 7)琉球國旧記(1650) 沖縄県立図書館の蔵書
- 8)①農務帳(西暦 1734=雍正 12 年、享保 19) 琉球王朝評定所 法司官蔡温 具志頭親方 分若、摂政三司官毛秉仁 美里親方安満、摂政三司官向和聲 伊江親方 伊江朝叙、摂政尚 徹 北谷王子 北谷王子朝騎 ②耕作方相試田地奉行所へ申出之條々(乾隆 10 年、西暦 174 5) 寒水川村金城筑登之親雲上 ③田方并芋野菜類養生方大概之心得 (年代不詳 1790?～1820?) 安里邑高良筑登之親雲上 ④西村外間筑登上親雲上農書(道光 18 年、西暦 1838 年、天保 9 年) ⑤耕作下知方并藪物作節附帳(道光 20 年, 西暦 1840, 天保 11 年) 大宜見間仕 地頭代山川親雲上、総耕作当 前田親雲上、宮城筑登之 ⑥八重山嶋農務帳(同治 13 年、西 暦 1874、明治 7) 富川親方 日本農書全集第 34 卷 日本農書全集編集委員会(1985(昭 60)) 農山漁村文化協会
- 9) 改訂沖縄農家便覧(1948) 第一版(1928)我謝栄彦 與儀農事試験場内振農會
- 10)宮古島旧記並史歌集解(1977) 稲村賢敷 至言社
- 11)日本甘藷栽培史(2002, March) 中馬克巳 高城書房
- 12)与那国の歴史(1980) 池間栄三著 池間苗発行
- 13)甘藷と野國總官(2004, April) 伊波勝雄、屋嘉比 収、崎原恒新、宮平友介、座喜味栄議 嘉手納町「野國總官甘藷伝来 400 年祭実行委員会」発行 丸正印刷

執筆者 沖縄県農林水産部営農推進課

工芸作物(サトウキビ)専門技術員 金城鉄男